ナマステ

特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌
159 号
2025 年 5 月 20 日発行号

夏～秋の主催事業のご案内

①　6/21(土)『自然文化誌研究会 50 周年記念①　座談会「学術探検と環境学習の創造」』
INCH の 50 年間のエッセンスを zoom で開催します、案内のチラシをご参照ください。

②　『こすげ冒険学校』　申し込みを開始しました、締め切りは６月 20 日（金）になります。
8/2-8 の６泊７日、対象は小学３年生～中学３年生、案内のチラシをご参照ください。

③　『タイ環境学習キャンプ』　今年も開催します！！巻頭でご案内しています。

④　『INCH まつり（ライブ)』　9/27 日に開催します！！巻末でご案内しています。

⑤『自然文化誌研究会 50 周年記念②　「50 周年記念の会」』4～5 ページでご案内しています。
10/4 に開催します！！

『タイ環境学習キャンプ』　8.17～8.25（７泊８日）開催します！！

観光では経験できないディープなタイの自然や文化を体験できるキャンプです。バンコクの北西にあるバンライという地方都市で環境学習を行なっているシリポン氏が主宰しているバンダキャンプを拠点として、野生生物の観察やワークショップなどの活動を展開します。（詳細については、ナマステの記事を参考にしてください。参加希望のある方は、事務局または中込のところまで６月 15 日までご連絡ください。

日時：８月 17 日（日）～８月 25 日（月）　※25 日は、朝日本に着く予定
費用：２０万円　※費用についてはあくまでも目安です。最近の円安の影響で上振れする可能性があります
訪問先：バンコク、バンライ、ファイ・カ・ケン野生動物保護区など
内容：
・ファイ・カ・ケン野生動物保護区での野生生物の観察、環境学習の実情視察、アウトドア体験。
・カレン族、ラオ族など少数民族の村の訪問、交流等
・バンライの教員、生徒とのワークショップ
連絡先：事務局または中込貴芳　Tel；090-8856-8788　Email; nakagomikiyosi@hi-ho.ne.jp

2025年　「冒険学校むらまつりキャンプ」報告

贄田隼人（だにえる・自然文化誌研究会 運営委員）

２０２５年５月３日～５日にむらまつりキャンプが開催され、大きな事故やケガもなく、無事に終了しました。今回のキャンプは予想を上回る参加の申し込みがあり、そこへ対応するスタッフに来てもらったことで、総勢１００名弱が集まるものとなりました。参加者の協力と、スタッフたちの頑張りで、例年通りのクオリティで楽しく過ごせる３日間になったこと、この場を借りて感謝します。

キャンプに限った話ではないのかもしれませんが、多くの人が集まって活動する場では、何かやりたいという気持ちの流れや渦のようなものを、僕は感じます。子どもも大人も関係なく、一人一人がもっているものでもあるし、人が集まることでより大きなものになるものだと思っています。キャンプの初日にテントを建てることで、生活の場が整っていき、流れができ始め、川遊びが始まるところで一度ピークを迎えたように思います。子どもたちがやりたいことに取り組むことで、気持ちと心を開放していく。「あれをやってみよう。これはどうだろうか。」「もっと楽しそうなことは無いか。」と貪欲に活動していく中で、大人たちもそこへ混じっていく。子どもたちはその姿を見て、さらに探求や発信を続けていく。

水温１２度ということもあり、川の冷たさは本当に体に堪えたと思いますが、参加者の大人たちとも水をかけあって遊ぶことができて、僕は楽しかったです。

寝食を忘れて、好きなことを追及することが、本会のキャンプの醍醐味の一つだと思っています。キャンプ場で、子どもたちは焚き火、川遊び、虫取り、風呂たき、工作など一心不乱に好きなことに打ち込んでいました。また、山菜採りやナイトハイク、星空観察などキャンプ場から出て、小菅のフィールドを楽しむこともできました。それだけでなく、今回のキャンプでは、夕食そっちのけで工作を楽しむ大人や、大人たち中心に滝を見に行くなど、大人が子どもたちと同じくらい活動を楽しんでくれている姿があり、嬉しさを感じるとともに、むらまつりキャンプが大成功したなと感じました。

８月には冒険学校が開催されます。多くの参加者とスタッフで、また喜びと楽しみの大きな渦を作ることを期待して、筆を置かせていただきます。

（スタッフの感想）

柚木菜花さん（なの・大学４年生）

前入り（4/30）から後日帰りまでフルで参加してみて、楽しかったのはもちろん、同時に「おつかれさまでした！！！」と強く思った。初参加から４回目のむらまつりキャンプで今更な感想かもしれないけど、今まで以上にそう感じた。夏もしっかり参加したいと思う。もっと色々なことができるスタッフになりたい。

（年上組が年下組の面倒を見ている姿がとても可愛かった）

川見美鈴さん（みれい・大学４年生）

見守りが監視にならないように気をつけたい。安全性も大切だが、あれもダメこれもダメと言われると、遊びへのやる気を無くしてしまう。

その両立ができないのなら、見守りをベテランに任せて自分も全力で遊んでみるのもありかなと感じた。

上山栞さん（ほっちー・大学４年生）

いつもキャンプに参加して思うことは、こんな風に子供と関わってみたいなという憧れと、こんなことが出来なかったなという反省と、今回自分ができたことはなんだろう、次回はどんなことが出来るだろうということです。毎回のキャンプを通して、自分の中に課題が生まれたり、小さな達成を感じられたりすることが、自分の進路にとって目印のような役割になっているのではないかと思います。改めてこのキャンプに参加させてもらえてることに感謝したいです。

子供が自分で「やってみたい」というのを形にしていたのを見られてよかった(竈を作って食材を焼く、燻製するなど)。自分にもそういう自由さと行動力と粘り強さが欲しい。

←スタッフの佐々木正久さんの YouTube「まー君のナチュラルフ」で、
「冒険学校むらまつりキャンプ」の活動の様子が観られます！！
（チャンネル登録よろしくお願いします）

＜令和６年度国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」助成を受けて開催しました。＞

10月4日開催『自然文化誌研究会50周年記念』のご案内

自然文化誌研究会（冒険探検部）50周年記念イベント

「INCHと私ー今までとこれからー」　開催のお知らせ

菱井優介（自然文化誌研究会理事）

時の流れは早いもので「そろそろ 50 周年、どんなイベントにしようか？」と有志でオンライン会議をして１年経ち、気が付けば開催まで半年を切りました。

今回のイベントは一言でいえば、『農園で大同窓会』です。
50年間で関わっていただいた方々に、新旧問わず集っていただき、思い出話とこれからについて語り明かしましょう！そんな会にしたいと思っています。

第１部は、「INCHと私の今までとこれから」と題し、参加型のトークセッション（オンライン配信あり）を行います。
第２部は、農園でINCHならではの料理と飲み物を楽しみつつ、さらに語り合う時間です。終了時間は、なんと決まっていません。農園にそのままテントで泊まるのもありです。（施設に許可を得てます。）残念ながら、ご参加できない方も、メッセージのみ投稿できるようにしています。ぜひ、「INCHと私」についてコメントいただけると嬉しいです。

みなさまと再会できることを心から楽しみにしております。　　実行委員一同

日 時　　2025年10月4日(土)　　12:00 開場・受付　　第１部 13:00～　第２部 15:00～
場 所　　東京学芸大学 環境学習研究センター多目的室および農園
対 象　　自然文化誌研究会 会員・元会員・ 冒険探検部・関係者
参 加 費　第１部 無料　　第２部　学生500円　一般1,000円　カンパ箱も用意しております。
（地方からの持ち込み大歓迎です！）
内 容
13:00 第１部 『INCHと私 これまでとこれから』
15:00 第２部 『50周年を祝うパーティー！みんなで盛り上がろう！』

＊お子様の参加について
参加は可能ですが、保護者の方が同伴で責任をもって安全管理をお願いいたします。
＊農園に泊まる方へのご案内
周辺へのご迷惑にならない範囲でお楽しみください。
テント、銀マットは事務局で用意しますが、寝袋は持参ください。

お申込みフォームはこちら https://forms.gle/EqNwsCVMfR2uU15f6
当時の思い出などを書き込めるようになっています。ぜひ事前に申し込みフォームからお申し込みください。

・８月下旬発行予定の「会報ナマステ160号」で詳細をご案内します。
ご不明な点ありましたら事務局までお気軽にお問い合わせください。
みなさまのお越しをお待ちしております。

自然文化誌研究会の足取り　その①

＜小菅村での冒険学校・ログハウスづくり・キャンプ場に関することなど、2001 年以降＞

50 周年記念誌の発行に向けてこれまでの活動をまとめています。1 ページ分余白があったので、その一部を掲載してみようと思います。名簿を見ていたら懐かしいみなさんの顔が思い浮かびました。　（事務局）

＊表中は敬称略

年度		主な内容
2001	4	小菅村が「多摩川源流研究所」を創設、井村礼恵（あべちゃん）がオープニングの主任研究員となる。
	年間	「第 14 期子どものための冒険学校」デイキャンプ×7 回　@東京学芸大学農園
2002	4	事務局が小川泰彦（ヤス）から、黒澤友彦（くろ）に代わる（黒澤は農園職員を兼任）
	年間	「公開講座 第 1 期ぬくい少年少女農学校」
2003	年間	「公開講座 第 2 期ぬくい少年少女農学校」、8 月に小菅村の舩木民宿に宿泊
	12	小菅村で初の冒険学校は「冒険学校まふゆのキャンプ」、@玉川キャンプ村で開催。以降 2025 年も継続中
2004	4	自然文化誌研究会は東京都認証の NPO 法人となる
	年間	「公開講座 第 3 期ぬくい少年少女農学校」
	5	「新緑キャンプ」を開催、@現在の清水バンガロー（いつものキャンプ場）を初めて利用した
	5	小菅村に拠点となる古民家を借りて事務局を移転する（黒澤が移住を開始）
	8	「野生キャンプ①」を開催、3 泊 4 日　@清水バンガロー
2005	4	「第 1 期ちえのわ農学校」が開催
	5	「冒険学校むらまつりキャンプ」に名称変更して第 1 回目の開催、以降、2025 年まで継続中。
	8	「野生キャンプ②」を開催→次年度から「こすげ冒険学校」に名称が変更となる
2006	4	小菅村の拠点を橋立地区に移転（東京学芸大学の連携推進室を兼ねる）
	4	菱井優介（ひっしー）が事務局員となる
	8	「こすげ冒険学校」の初開催。5 泊 6 日、8/22-27、参加者は 3 名しかいなかった・・・。
	8	「やまめキャンプ」の初開催。1 泊 2 日、対象は小 3～高 3（大人の募集は無かった）
	12	菱井優介が事務局として小菅村へ移住
2007	8	「やまめキャンプ②」、親子での参加募集をはじめた
	9	黒澤家が小菅村で結婚式を開催@小菅村中央公民館、はるちゃんが小菅村へ移住をする
2008	2	「ログスクール」の開始、現在のログハウス A 棟を建てながらの事業。当初は壁無しの東屋の予定だった
	5	「むらまつりキャンプ④」、親子での参加を可能に変更した。以降、2025 年まで継続中
	12	菱井優介が小菅を旅立ち、トムソーヤクラブへ移籍する
2009	7	佐々木正久（まーくん）が囲炉裏を作る。囲炉裏を作る前は土間だった。
	8	「やまめキャンプ」＋「いわなキャンプ」として、1 泊 2 日の連続参加を可能にした。
	9	橋立の古民家拠点を返却する（ログハウス A 棟も完成するので泊まれるようになった）
	11	ログハウス A 棟が完成
2013		この頃にログハウス B 棟を建築中。1 階は土間の（雨天時）作業場として設計していた、その後、床と壁を入れた
2019	7	「こすげ冒険学校」の開催前にトイレ棟完成。それ以前はボットン便所で、みんな苦労したね
2020	通年	コロナ禍の影響で冒険学校は非開催になるが、スタッフで研修を進めて次の開催に備えていた時期

＜冒険学校の村長の歴史＞

2003 年～2009 年までは全ての冒険学校で鈴木英雄さんが村長を務めています、その後もボチボチ。

2009～2011 年の「こすげ冒険学校」では佐々木正久さんが村長を務めました

2013～2022 年まで雫永法（しずく）さんが夏を中心に村長を務めました。

2021 年の冬に贄田隼人（だにえる）さんが初村長を務め、夏は今年で 3 回目の予定。ここで一気に若返り、熊木日向（ひなた）さん、鈴木風馬（ふうま）さんも冬に村長を経験しています。横山昌佳（まーしー）さんは村長の予定だったけど来られずに幻の村長となりました。

『藤農便り』 第40号

宮本茶園　宮本透

相模原の季刊総合雑誌アゴラから佐野川茶の神奈川県茶品評会・茶園共進会上位入賞に至るまでの取り組みを報告してほしいと依頼がありました。アゴラ 94 号に「佐野川茶誕生と足柄茶北端産地の未来」を投稿してから５年、残念ながら後継者を育てられず昨年より佐野川茶製品原料の茶葉を生産する農家は２軒だけになってしまいました。足柄茶北端産地が終焉を迎えようとしている状況や産業としての茶栽培継続に全力で取り組む農家の矜持を相模原市民の皆様にお伝えしたいと思い、アゴラ 112 号へ「佐野川茶相模原ブランド構築の歩み」を投稿する事にしました。

先輩農家から借りた資料をひもとくと、佐野川の茶栽培は 1930 年代の旧佐野川村役場記録に残り百年近くの歴史を刻んでいます。2018 年藤野茶業部佐野川茶誕生以来取り組んできた栽培技術向上・製品開発・販路開拓等を振り返りながら、パソコンに向かい原稿を書き上げました。文中「私が認定農業者になり新規就農を志す研修生を受け入れ、茶園経営で十分な所得を得られる農家仲間を育てられれば、産業としての茶栽培は必ず生き残ると確信している」と記しました。先日相模原市役所から「農業経営改善計画認定申請書」をいただきました。認定農業者になれるよう、更なる精進続けます！

・春の茶仕事

２月の寒肥、３月の春肥を茶園に施すと休む間もなく春整枝作業が始まります。藤野茶業部員・ヘルパーの高齢化は深刻で、３人いるヘルパーの２人が体調を崩し宮本茶園のアルバイトを引き受けてくださったのは１名でした。春整枝は茶畝の樹冠面をていねいに刈り落として凹凸を揃える作業で、深く刈り過ぎると最初に伸びる新芽を落としてしまい摘採が遅れてしまいます。茶園によっては数mm単位の繊細な作業となるので、誰にでもできる仕事ではありません。３月中旬から作業を始めたのですが機械操作の負担がきつかったようで、５日目にヘルパーが膝を痛めてしまいました。作業を中止し帰宅いただいたのですが、残った茶園を整枝する目処が立たず途方に暮れてしまいました。日頃交流のある和田の里みちくさの会を頼って機械操作のできる会員に整枝作業をお願いすると「困った時はお互い様ですよ、お手伝いしましょう」と快く引き受けてくださいました。日没までの２時間ていねいに整枝作業をしていただいた茶園、夕闇に包まれようとする景観をご覧ください。(写真①)

４月 18 日県農業技術センターの茶園巡回指導がありました。部員の全茶園で新芽開葉数と長さを調べ、巡回後の部会で摘採日程を検討しました。会議の中で普及員の先生から「上岩の更新茶園は摘採直後に、できれば摘採前に時間を作って整枝しましょう。夏整枝まで持ち越すと徒長枝の芽が伸びて枝が細くなり、来年の新芽が不揃いになってしましますよ」と助言いただきました。藤野茶業部には JA 神奈川つくい本店から紹介された援農ボランティアがいて、作業を手伝ってもらっています。更新茶園の整枝作業を依頼し、５月１日作業を担っていただきました。シカにかじられ凸凹の長さになった徒長枝を刈ならし機で整える根気のいる仕事、本当に助かりました。(写真②)

春肥・春整枝と茶園管理ごよみの作業を行った茶園は今年もきれいな新芽を伸ばし、良質の茶葉収穫を期待しています。(写真③) しかしながら藤野茶業部は 2025 年度末解散が決まり、部活動の摘採作業は今年が最後です。認定農業者になる努力を続ける私は今春の管理作業のように市民グループ・援農ボランティアの支援があれば、部会解散後も佐野川茶製品の製造・販売継続は可能だと考えています。産業としての佐野川の茶栽培、引き継いでくれる若い新規就農者との出会いを熱望しています！

①

②

③

・野草の天ぷらとお茶摘みの会（４月 20 日：東京学芸大学　環境教育研究センター）

INCH 恒例行事の野草の天ぷらとお茶摘みの会、木俣師が定年退官されてからは縁遠くなった母校学大キャンパスに立ち入る数少ない機会です。初老となった冒険探検部の古い仲間やすっかり大人になった冒険学校卒業生等、懐かしい仲間と会う事が楽しみで講師を続けています。40 年数年前の学生時代、やぼ耕作団の明峯さんたちと企画した味噌作りの会、部室で仕込んだどぶろくを飲みながら野草を摘んで皆で食したのがこの伝統行事の起源でしょうか？INCH50 周年、こぼれ話の一つです。

今冬は寒い日が続き３月になってからも雪が降り、茶の新芽は昨年より１週間程遅れています。佐野川の茶園は萌芽期で開葉数は一枚程度ですが、彩色園の茶畑は一芯二葉まで育っています。50 名限定申し込みの参加者と学生スタッフ総出で摘んだ茶葉は 800g でしたが、皆さんがていねいに作業をしたので古葉やゴミの混入はほとんどありませんでした。ホイロの助炭で蒸した葉を揉む事１時間、160g の新茶ができあがりました。事前打ち合わせで新芽の生育が遅く収量が少ないので試飲無しと決めたのですが「手もみした新茶を飲みたい」という声が多く、急須と紙コップを用意してもらいました。

野草の採集は樹木医の岩谷さんの指導で行われました。茶葉のかき揚げができなかったのは残念ですが、柿の葉・タンポポの花・ヨモギ等春の味を楽しませていただきました。ちーむゴエモン活動で高橋師からいただいた手作り醤油を持って行ったのですがとても好評で、来年は佐野川チームが仕込んだ醤油を提供して皆さんに味わっていただきたいと思います。

・春の穀物畑・花卉畑

穀物畑では小麦が出穂してきました。麦の穂波がそよ風に揺れる光景は季節が春から夏に移っていく事を感じさせてくれます。しばらく栽培していなかった南部小麦・大麦・団子麦も少しずつ育てています。種子を分けてくださった篤農の気持ちを受け止め、しっかり種継します。

昨夏熱中症で救急搬送された時、高村師から「宮本さんが命を削って献花用の生花を育てても、相模湖ダム建設で命を落とした犠牲者は喜ばない。無理するのはやめなさい」と諭されました。花卉畑の作付けは出荷用盆花だけにしようと考えていたのですが、追悼会事務局長の古澤さんが「一緒に作業しますから今年も生花栽培を続けましょう！」と声をかけてくれました。栽培担当の吉田さんも引き続き作業を担ってくださるので、植付準備をしています。５月７日吉田さんと会場飾花に使うロシアヒマワリを播種、献花用生花の播種は古澤さん親子と作業します。2020 年から始まった相模湖・ダム建設殉職者合同追悼会の生花栽培、新しいメンバーが増え今年も続ける事ができました。

※佐野川に興味のある方は宮本（携帯：090-2205-8476　　e-mail：kwangjuu1980@yahoo.co.jp）へご連絡ください。

植物と人々の博物館
Plants and People Museum

Vol.39　　西村俊　自然文化誌研究会理事

季節の変わり目が曖昧になっているように感じますが、道端に目を向けると草木や花々の彩が鮮やかとなり、春から夏へ段々と変化してきていることを実感できます。田畑でも人々が田植えや播種の準備を行っている姿をあちらこちらで目にするようになりました。冬の間は休館していた植物と人々の博物館も再開しています。森とむらの図書室を充実させました（蔵書リスト：https://www.milletimplic.net/forestvil/forestvil.html ）。連携しているタイ・日本自然クラブの展示も再開しています。ご訪問・ご利用頂き、お時間の許す範囲で整理もご一緒に手伝っていただければありがたいです。数人でまとまって整備と資料の共有を行う作業日を新たに設けていますので（写真）、ご興味・ご関心のある方は事務局までお問い合わせ下さい。

民族植物学ノオト第 18 号を 3 月末に発行しました。ホームページ上で「ミュージアムグッズ」から閲覧ください。第 19 号は 2025 年 12 月末の原稿締切です。バックナンバーもご参照いただき、ぜひ自由な発想や見解で、原稿をお寄せください。

【連携団体からのお知らせ（注：会期を終えたイベントも含みます）】
・ざっこくのふしぎ展（東北大学統合日本学センター）
https://cijs.oii.tohoku.ac.jp/news/detail---id-52.html
・田んぼのイロハ田植え編（ECOPLUS）　https://ecoplus.jp/2025/02/07/rice_workshop_2025/
・オンライン学習会：不自然な食べ物―完全食・超加工食品など（OK シード・プロジェクト）
https://v3.okseed.jp/event/6062
・はけと野川の文化祭（はけの自然と文化をまもる会）　http://hake-bun.blogspot.com/

タイの民具整理の様子（4/28 中込代表理事、中込副代表理事）

応募のプロから一筆啓上

横山昌佳（まーしー）

十年続けるとプロになれる。何事も、十年努力すればものになる。著名な人物はそう口を揃え、物の本にも書いてある。それで、大学生の頃から小説を書いては様々な文学賞に応募し、応募してはまた書いた。十年、二十年が経って、ようやくぼくはプロになった。

応募のプロになったのである。

例えば、原稿に一筆手紙を添えるべきか、という問題がある。結論から言うと、その一筆は審査に関係がない。が、原稿を受け取る人や読む人のことを考えると、評価に影響しないとしても、やはり一筆添えるべきであろう。これがプロの心構えである。

さて、ナマステに掲載するに当たっては、自然文化誌研究会の趣旨に沿ったものとしたい。小菅村のキャンプを通した環境教育の実践。その上で、小説を書く意義とは何か。

レオ・レオニ「フレデリック」の中で、主人公は周りの野ねずみが立ち働く中、寝っ転がって何もしない。「言葉を集めている」と言って、何もしない。やがて、冬が来て穴に籠もり、仲間たちは無聊に苦しみ始める。そこで、フレデリックは話し出すのだ。青い空や金色の光、季節を言祝ぐ詩の数々を。

薪を割ったり食事を作ったり、沢登りの指導をしたり。キャンプでは様々なアクティビティがあるが、その中でぼくは言葉を集めている。小説というのはつまり、目に見えない・役に立たない部分を言語化する作業である。「活動記録」ではこぼれ落ちてしまうものを拾い、フィクションとして復元する。

いつだったか、到着した子供たちにキャンプ場を案内し始めたとき、

「まーしーは、来年も来る？」

と訊かれたことがあった。「仲良くなっても良いか」を、事前に確認したのである。これっきりの人とは友達になっても寂しいだけだ、だから、前もって「この人との関係が今後も続くか」を訊ねたのだ。

ぼくが注目するのはこういう心象である。人間と人間とが触れ合う中の、プリミティブな感情。写真や出来事の記録では見えないし、見えるまでに時間もかかる。焚き火をしたり、佐々木さんの声を聞きながら星空の下で寝てしまったり。その非言語的な体験を、小説の形で言語化していく。

ぼくは応募のプロである。だから、落選しても諦めないし、再び書くのをためらわない。キャンプで酒を飲んでいるだけ、と言われても苦にしない（ちょっと気にする）。ぼくは書く。何度でも書く。穴ぐらの中でひっそりと、ねずみのフレデリックよろしく。

そういうわけさ。

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.15　その４

冒険学校は「冒険」なのか（前編）
「行きて帰りし物語」をめぐって

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

小さい頃、時間を忘れるまで遊んだこと。
夢中になりすぎて、大人になってみたら「何が楽しかったんだろう」と思うこと。
そんな経験はないだろうか。
今回は、そんな「遊び」としての冒険について考えてみたい。

1.キャンプは「ジブリっぽい」？

よくある自然体験の感想の一つとして、「ジブリっぽい」という言い方を耳にすることがある。実際、自然文化誌研究会においても、少なくとも同世代くらいまでは、ジブリが好きなスタッフが多いように感じる。（私とはるちゃんと日向あたりで延々と擦っているジブリネタが、若い学生には通じなくなりつつあるのも事実だが）。

たしかに、キャンプで目にする景色は、しばしばジブリに描かれるような情景と重なることがある。あるいは、宮崎駿の「未来少年コナン」（1978）、「風の谷のナウシカ」（1984）、「となりのトトロ」（1988）、「もののけ姫」（1997）もしくは高畑勲の「平成たぬき合戦ぽんぽこ」（1994）といった作品に見られる左派的な環境思想が、本会を含め 1970 年ごろ本格化した日本の環境教育思想と重なり合う部分を持つことは事実だろう。

しかし、そうした情緒的・イデオロギー的なものとは別に、**一部のジブリ作品が持つとある構造が、冒険学校の体験と通底していることが、件の「ジブリっぽさ」の一端を担っているのではないか**というのが、私の見立てである。それは、ジブリに限らず多くの児童向け小説や絵本が持っている「行きて帰りし物語」という構造である。今回は、教育哲学者の矢野智司による絵本の分析を参照しつつ、この見立てについて考えてみたい。

2. 行きて帰りし物語

映画「ロード・オブ・ザ・リング」を見たことがある人は、どれくらいいるだろうか。R・R・トールキン原作『指輪物語』を映画化したこの作品は、本編だけでも（ショート動画が流行り、倍速で映画を見る現代人にとっては恐ろしく長い）三部作からなるが、前日譚的な作品があることは、ファンタジー好きには周知の通りである。

「行きて帰りし物語」は、この前日譚にあたる小説『ホビットの冒険』の原題、*The Hobbit, or There and Back Again* に由来する。訳者の瀬田貞二は、この副題を「行きて帰りし物語」と訳したうえで、この「行って帰る」という構造が、昔話や絵本など、「幼い子どもが喜ぶ話」の「根幹」であるという仮説を示した（瀬田 1980:7, c.f. 矢野 2024:2）。

ジブリ作品のなかでは、「千と千尋の神隠し」（2001）が「行きて帰りし物語」の典型である。

主人公の千尋は、引っ越しのさなか、両親とともに(なかば両親のせいで強引に)不思議な街へと迷い込む。そこは、八百万の神々が疲れを癒しに来る湯屋を中心とした異界の歓楽街であり、千尋は従業員として働きながら、両親とともに元の世界に戻る方法を模索する。

ナウシカ（腐海）にせよ、もののけ（シシガミの森）にせよ、ラピュタ（天空の城）にせよ、ジブリ作品の多くはこうした「行って帰る」という構造を持っている。

一方で、「トトロ」や「ポニョ」といった作品は、子ども人気が極めて高いにもかかわらず、しばしばホラー的な都市伝説が囁かれることがある。これは、「行きて帰る」の「帰る」の描き方が曖昧であるがゆえに、子どもの遊びが孕むある種の「危うさ」を、これらの作品が持ち合わせているからであると考えられる。

3. 「かいじゅうたちのいるところ」

矢野が指摘するように、子供向けの絵本もまたこの構図を持っている。それは、必ずしもホビットや千と千尋のような本当の冒険の話でなく、子どもが日常の生のなかで体感している「遊び」を描き出したものであることも多い。

代表例は、モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』である。

部屋に居ながらにして恐ろしいかいじゅうたちの国へと冒険する少年マックスの物語は、多かれ少なかれ、**幼いころ誰しもが体験した想像の世界、ごっこ遊びの世界**を彷彿とさせる。特筆すべきは、このお話がただ「行く」だけでなく、「帰る」という部分の重要性を端的に示している点である。想像のなかの冒険は、一見マックスに都合の良いようにできており、彼はかいじゅうたちの王様になる。ところが、マックスはだんだんと自分の部屋が恋しくなってくる。この冒険が単なる想像であり虚構だとわかっているのであれば、即座にやめればそれで済む話なのだが、そうはいかない。

マックスは、もはや自分の生み出した世界のなかに、登場人物の一人として完全に没入しており、空想世界は彼の手を離れて自律的に運動し始めているのである。かいじゅうたちは徐々に、マックスを「食べてしまいたいくらい好きだ」と言い始める。

このお話には、**子どもが遊びに夢中になっているときに見せるような姿**そのものが現れている。遊びの世界に没入した子どもは、周りの声が聞こえなくなったり、大人から見れば全く同じことであるにも関わらず繰り返し続けたりする（絵本の読み聞かせをなん度もせがんだ経験のある人も多いはずだ）。空想世界でのマックスの冒険が、いくつもの海を越え何ヶ月もかかるものとされているのも、「遊び」特有の無時間的な感覚を示唆している。

日常の常識的な時間的・空間的な感覚が解体されるほどに夢中になれる「遊び」は、それだけ楽しいものである反面、日常の生を危機に晒すことで成り立っている。この場合、マックスは空想にも関わらず、「かいじゅう」に食べられて世界の一部になってしまう危うさと隣り合わせでもある。

これに対し、マックスが元の世界に戻ることができるのは、「お腹がすいた」というまさに日常の生の感覚であり、それと呼応するかのようにして漂ってくる現実の「ご飯の匂い」である。マックスはそこで、この世界が空想の世界であることを（明示的ではないが）思い出し、現実世界に「帰る」ことができる。

だからこそ、「帰る」が明確に描かれない物語は、子どもにとっては永遠に続く遊びの世界である一方、日常に生きる大人から見ると、どこか異質な怖さを帯びてくるのである。

さて、このように「行きて帰し物語」として捉えられるような「遊び」の経験は、人間が成長する上でどのような意味を持っているのだろうか。

またそれは、冒険学校という教育の場でいかに看取されるのだろうか？

（次回に続く）

矢野智司・佐々木美砂, 2023, 『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか：空間の絵本学』勁草書房.
瀬田貞二, 1980, 『幼い子の文学』中公新書.
センダック, モーリス, 1975, 『かいじゅうたちのいるところ』神宮輝夫訳, 冨山房.

INCH まつり（ライブ）開催のおしらせ

秋の一大イベント「INCH 祭り（ライブ）」を開催予定で進めています！ライブをＢＧＭに、のんびりとお酒、お茶でも飲みながら過ごしませんか！！　音楽を愛する方は楽器持参で、腕に自信のある方もない方も、歌わない方も、お酒を飲まない方も、久しぶりの小菅村の方も、ぜひぜひお越しください♪　音楽しない方はのんびりしていても、もちろん OK ですよ～♪

冒険学校スタッフの普段見られない姿にも出会えますよ♪

■日程９月 27 日（土）16:00 開演～9 月 28 日（日）日帰りも OK、早く来られる人はご一緒に準備を！

■会場：清水バンガロー（小菅村いつものキャンプ場）

■対象：子ども単独での参加はできません（全員が参加者になるので冒険学校的なスタッフはいません）

■費用：日帰り 1,500 円 宿泊 3,500 円 食事付

■お酒はカンパ制です。持ち寄り大歓迎！！

■温泉代は各自（割引券アリ）です。

■交通機関　※小菅村までの交通は自力になります。

■お申し込み：9/25 までに事務局までご連絡ください。

■9/28 は予定が無いのでのんびりしていってください。

○　事務局の麗しき日々

・千翔ちゃんもボビーも結婚したもよう
・緑さんは腰のケガで療養中のもよう
・ハッシーは教員になったもよう
・匠は山菜採りでスマホを落として使えない（奴の）もよう
・ノリは就職したものの懐事情は大変厳しいもよう
・日向はランクルを購入したもよう（ノリと日向は同級生）
・INCH の中にも格差は確実に存在するもよう
・みややんのアルハラに先輩たちも怯えているもよう

○　自然文化誌研究会　一緒に活動しませんか？

略称 INCH（インチ）。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40 年以上にわたって活動を続けています。2004 年から NPO として再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座（のびと研修会）』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額（1～12 月）です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正 会 員：10,000 円　一般会員：5,000 円　学生会員：3,000 円
賛助会員(個人・団体)：10,000 円　家族会員：6,000 円
植物と人々の博物館友の会会員：3,000 円
雑穀街道特別会員：１口 1,000 円から

・成合基金（冒険探検基金）：「成合基金」とご記載してください。
・寄付：「寄付」とご記載してください。

❶郵便振替口座　：　00100-2-665768
口座名　：特定非営利活動法人自然文化誌研究会
❷ゆうちょ銀行：店名 ００八　普通口座
口座番号　９４７９４５０
口座名　：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

ナマステ 159 号

特定非営利活動法人　自然文化誌研究会　会報誌
＜発行日＞2025 年５月 20 日
＜編　集＞自然文化誌研究会　事務局
＜発　行＞　特定非営利活動法人

自 然 文 化 誌 研 究 会
The Institute of Natural and Cultural History

＜事務局＞〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2
TEL：090-3334-5328（事務局 黒澤）
E-mail：　npo_inch@yahoo.co.jp
ＨＰ：　http://www.npo-inch.ppmusee.org/index.html